

第24回 国際パネルディスカッション

「これからの石油・エネルギー情勢をどう見るか」

2015年2月5日 (木)
経団連会館国際会議場

開会挨拶

(一財) 日本エネルギー経済研究所 理事長 豊田正和氏

パネルディスカッション

<パネリスト>

FACTS グローバルエナジーグループ会長	フェレイダン・フェシャラキ氏
Sierra Oil & Gas 社長	イワン・R・サンドレア氏
(一財) 日本エネルギー経済研究所 常務理事 首席研究員	小山堅氏
(独) 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 上席エコノミスト	野神隆之氏

<司会>

日本経済新聞社 編集局編集企画センター兼国際アジア部 編集委員	後藤康浩氏
------------------------------------	-------

主 催

(一財)日本エネルギー経済研究所
JX日鉱日石エネルギー株式会社
JX日鉱日石リサーチ株式会社

要旨

1. 国際石油需要情勢展望

- 2015 年の世界需要の伸びは総じて低調。米国のみ堅調。原油需要は、過去原油価格との相関関係が高かったが、現在新たなサイクルに入った状況〔フェシャラキ氏〕
- 石油需要は経済成長の影響が強い。米国以外では、経済減速およびドル高が需要の足枷になっている。2015 年の世界需要の伸びは、90 万 BD に届かない〔野神氏〕
- 過去数か年の需要の伸びは極めて高かったが、構造変化により需要に対する期待値が変わった。過去のように年間 150 万 BD 増えるようなことはなく、今後 2-3 年需要は低迷する。〔サンドレア氏〕
- 新興国・欧州経済が減速、米国が世界経済牽引という構造は 2015 年も変化なし。今年の世界石油需要の伸びは 100 万 BD 前後。需要については、備蓄要因にも注意が必要〔小山氏〕
- OPEC は、需給環境は今後しばらく弱いと考えている〔フェシャラキ氏・サンドレア氏〕
- 経済減速で中国の石油需要は伸び悩み。補助金削減もありアジアの需要急伸は考えづらい。〔野神氏〕

2. 国際石油供給情勢展望

- 供給力の増大は、ここ数年米国・カナダ・ブラジル・イラクに集中。過去 100 年で年間の供給の伸びが 100 万 BD を超えた年は 20 回で、過去 7 年の内 4 年間がこれに該当、ここ数年の供給増は歴史的にもまれ。現在、世界全体で政治的要因などで 300 万 BD の供給が停止中。今後は、NGL とカナダのオイルサンドは安定的に伸びていく〔サンドレア氏〕
- 地政学リスクの観点から、今年はイラン核開発問題にも注目したい〔小山氏〕
- 過去 4-5 年の米国 LTO 増産は、OPEC 内に第 2 の産油国が新たに出現したのと同等のインパクト。もはや石油供給は OPEC を超えた問題。米・露両国は現在各々 1000 万 BD の原油生産量だが、近い将来どちらもサウジを超える生産能力を持つ。供給過剰は 4-5 年かけないと解決しない。ボラティリティーと低価格への対応能力が重要〔フェシャラキ氏〕
- 日本は 15 年以内に石油需要が 5 割減るという大変動期に突入。日本の需要減は不可逆的で石油業界の再編は必至。現在 5 社ある大手元売りは 2-3 社に集約される〔フェシャラキ氏〕
- 米シェールオイル、全生産量の 8 割が 2 割の生産地から産出。シェールガス・オイルの経済性は可変的なもの。深海油田生産は現在約 600 万 BD だが、減退率が高く将来は伸びない。リスクの高い海上から、有利な陸上へと開発地域がシフト中〔サンドレア氏〕
- 中期的に世界の需給で重要なのは米シェールオイル。60 ドルくらいで米国シェールオイルの 2 割が採算割れに。しかし油価下落から生産減退までにはタイムラグがある。〔野神氏〕
- 80 年代半ばや 90 年代の低油価の時期に、石油産業は生き延びる対応力を鍛え上げてきた。今後関連産業がどうコストを下げ、新しい均衡価格で生きていくかに注目。〔小山氏〕
- 原油価格は、今年第 3 四半期に 50~55 ドル、第 4 四半期に 50~60 ドル、2016 年に 60~70 ドル（いざれもブレントベース）と考えている〔フェシャラキ氏〕
- 短期的には第 1 四半期で WTI45 ドル程度まで下落する場面もあるか。第 2 四半期には 60 ドル程度まで切り上がる。その後今年中は 50~70 ドルで推移〔野神氏〕
- 昨年 12 月にエネ研が発表した見通しのとおり。つまり 2015 年通年で平均 60 ドル。前半は

これより低く、後半はこれより高い。2020年前後には80ドルまで上昇〔小山氏〕

3. 天然ガス・LNG 情勢の展望他

- 2015年は、世界LNG需要全体で2億5,000～2億5,500万t、供給は2億6,000万t超。供給過多でかつ原油価格低迷で価格も低下。北米産のガス輸入は引き続き重要〔小山氏〕
- 日本の原発稼働率15%を前提にするとガス需要は伸びない。この状況下では長期契約は頭打ちで短期・中期契約が伸びる。油価連動方式の方が価格が高く、ヘンリーハブ連動だと安いという単純な図式ではない。契約方式が異なるだけだ〔フェシャラキ氏〕
- 米国のガス価が安いのは安い石炭と競合関係にあるため〔野神氏〕
- 需要面ではアジアと中南米での伸びが期待できる。供給面では一部の高コストプロジェクトは見直しとなる。小さくとも新技術を採用のプロジェクトに期待〔サンドレア氏〕
- これから5年間はスポット価格は大体7～8ドル/百万BTUくらいに収めんする。現在日本のガス価が高いのはオイルリンクが理由ではない〔フェシャラキ氏〕
- 日本の企業がヘンリーハブリンクに活用しようとしたのは、想定された価格面での有利性だけでなく、新しい供給ソースから自由度の高い供給を獲得することが目的だった。アジアのバイヤーは市場の需給状況を見極めて、それを「活用する」戦略が重要〔小山氏〕
- 米国からのシェールガスの大量輸出に関しては疑問視している〔サンドレア氏〕
- 米国のシェールガス開発は不確実性が高まっており、実現は計画の3割程度か〔野神氏〕